

仙覚の軌跡（五）

仙覚をめぐる諸問題

仙覚は、小川町の地にも何らかの足跡を刻んでいたと考えられる。仙覚と小川町の接点を示すものは、『万葉集註釈』の奥書だけだが、当地の発展にも少なからず貢献した人物だったのではないだろうか。以下では、そうした問題も含めて、仙覚をめぐる論点について考察してみたい。

仙覚の出自と墓所

仙覚の出自については、比企氏の一族とする説が根強く、生年の一致から、仙覚＝比企員茂とする見解もある。しかし、比企氏の系図によれば、員茂は比企郡で誕生して、越後国に移住して、弘安元年（1278）7月に死去している。こうした経歴の人物を、仙覚と同一視するのは無理だろう。仙覚を比企氏の一族と考えるのは、魅力的な仮説といえるが、もともと仙覚は常陸国の出身で、宇都宮歌壇の一員だったので、笠間氏や小田氏らの縁者だった可能性も考慮すべきだろう。

では、仙覚の終焉の地はどこだったのだろうか。麻師宇郷（小川町増尾）にも来訪したが、一時的な滞在とみられる以上、必ずしもこの地で最期を迎えたとは限らない。一説には、仙覚は新釈迦堂があった鎌倉の比企谷に埋葬されたという。ただ、晩年の仙覚が金沢氏に仕えていた点を踏まえれば、金沢氏の菩提寺である称名寺（神奈川県横浜市）で供養された可能性もあるだろう。

鎌倉街道を通じた交流

仙覚は、新釈迦堂領を維持するために、しばしば麻師宇郷に下向していたと考えられる。小川町の地には、鎌倉街道上道が通っていた。この街道は、相模国（神奈川県）の鎌倉を起点として、武蔵国の国府を經由した後、奈良梨（小川町奈良梨）などの地点を通過して、上野国（群馬県）に抜ける中世の大動脈だった。したがって、鎌倉街道上道は、鎌倉の新釈迦堂と、比企郡の麻師宇郷とを直結するルートであり、仙覚が歩いた道としても評価できるだろう。また、仙覚は、鎌倉と比企郡を往復することで、鎌倉の文物を地域社会に伝達する役割を担っていたと推定される。

宗教的な環境の整備

小川町の地では、鎌倉期に信仰的な基盤が確立されたと考えられる。穴八幡古墳（小川町増尾）の石室には、建治4年（1278）2月の紀年銘がある。梅皇子塚（小川町大塚）の場合は、やや情報が錯綜しているが、皇子を埋葬したという伝承があり、建治2年（1276）に建立された大梅寺が跡地に存在している。こうした史料には、なお検討の余地があるが、建治年間（1275 - 1278）、麻師宇郷や大塚郷の一带で、信仰の拠点が整備されたことは確かだろう。これらの地域は、新釈迦堂と関係が深く、一連の事業は、新釈迦堂の勢力によって推進された公算が高い。仙覚は、文永6年（1269）に小川町の地を訪れて、弘安3年（1280）まで存命していたので、建治年間（1275 - 1278）に進められた聖地の整備に、仙覚が関わっていた可能性も指摘できるだろう。つまり、仙覚は、小川町の地における仏教文化の発展にも寄与した人物だったと想定されるのである。

天台宗の寺院の成立

やがて小川町の地には、天台宗の寺院が建立された。たとえば、大聖寺（小川町下里）は、南北朝期の暦応3年（1340）に創建されたという。おそらく仙覚を始めとする天台僧によって、小川町の地に寺院が建立される素地が形成されたのだろう。ちなみに大聖寺は、「石青山」という山号に象徴されるように、緑泥片岩を切り出した下里・青山板碑製作遺跡が付近に広がっており、板碑と呼ばれる供養塔婆の石材を産出・加工する拠点だった。小川町は、和紙の産地として有名だが、中世の東国で隆盛を誇った板碑の供給源だった点も、注目に値する事実といえるだろう。

おわりに

仙覚は、『万葉集註釈』を著した業績で世に知られているが、歌人・天台僧・経営者・文筆官僚など、多彩な顔を持った人物だった。彼の主要な関心事が『万葉集』の研究だったことは疑いないが、それが仙覚の様々な活動の一面にすぎなかった点も、併せて銘記しておくべきだろう。仙覚に関する史料は少なく、その生涯を論じるには制約が大きい。今後の研究では、仙覚の多様な側面に目を向けて、より総合的な把握に努めていく必要があるのではないだろうか。（了）